

戦国末期の武家から都市大坂の牢人へ

大学の知を発掘!
007

大阪市立大学は、都市大坂(大阪)や周辺農村に関する膨大な史料群を所蔵する。ここでは、土田文書を取り上げよう。

写真の史料は、多賀道悦が息子の松之助に、先祖について書き残した貞享4年(1687)の覚書である。これによって戦国末期の武家が17世紀の大坂で牢人(浪人)となっていた経緯がうかがえる。

道悦の祖父土田圖書は、「田中兵部殿」から知行1700石を受け、鉄砲の者70人を預り、筑後の吉井を居城としたとある。田中(兵部大輔)吉政は豊臣秀次・秀吉に仕えた後、関ヶ原では東軍に付き、慶長6年(1601)から柳川を居城に筑後一国を治めた大名である。

道悦の父土田清左衛門は、圖書の跡を継いだ但が、「兵部殿」(実は吉政は既に亡く2代目の忠政)が元和6年(1620)に嗣子なく没し、田中家が改易され牢人となる。翌年、肥後の加藤忠広(清正の子)に1000石で抱えられたが、忠広改易により、寛永9年(1632)に再び牢人、その後讃岐の生駒(壱岐守)高俊に「牢人分」として50人扶持100石の俸禄で抱えられるが、寛永17年(1640)の「生駒騒動」(お家騒動)で高俊が流罪となり、三度牢人となる。

その後、牢人のまま大坂で73歳で死去したとある。

この覚書は、後年に多賀道悦が書き記したもので、土田文書に残る天正末から文禄期の知行宛行状などに照らすと不正確な部分もある。しかし、多賀道悦の祖父土田圖書や父清左衛門は、田中家・加藤家・生駒家と主家を変えながら、ついに大坂で牢人暮らしとなり、道悦本人も大坂で牢人していたことは事実である。

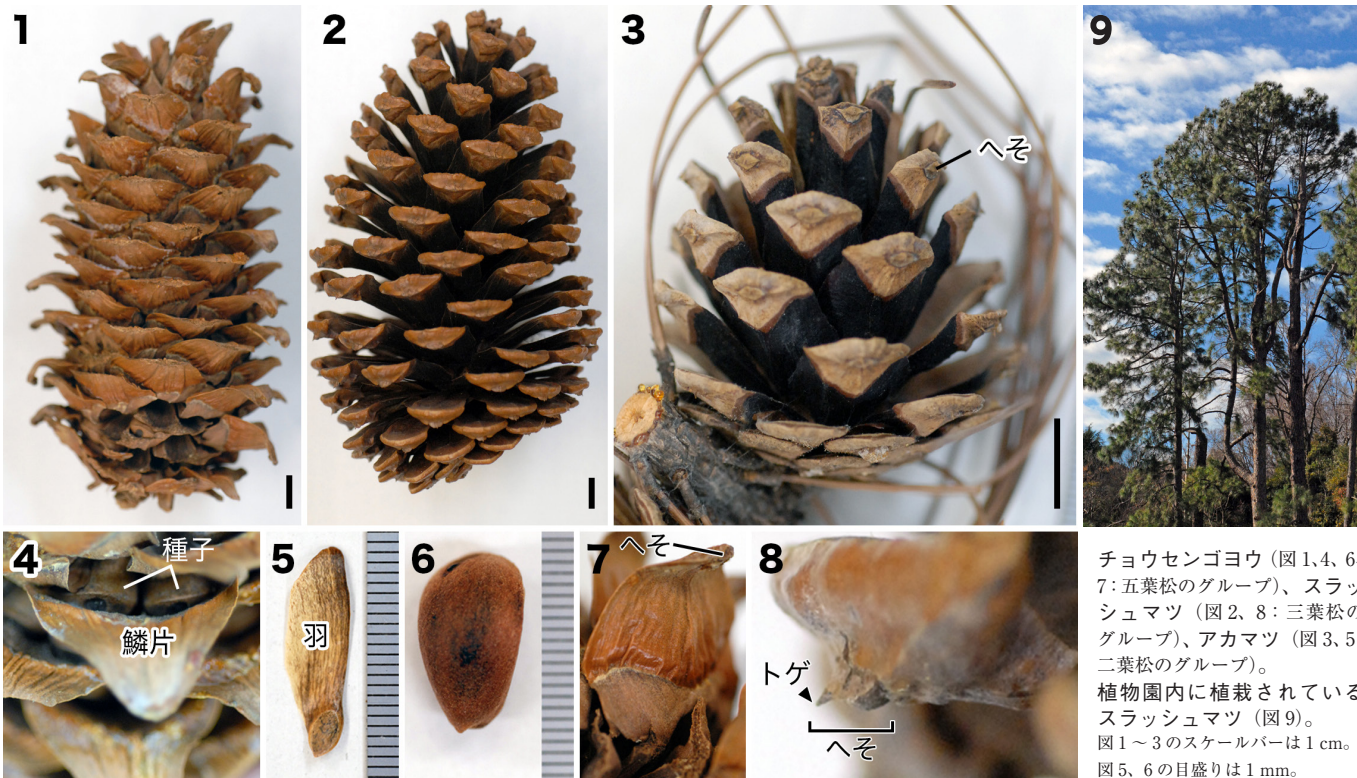
17世紀半ばの大坂の法令などを見ると、当時、牢人の町方居住について厳しく制限しており、その取締りが大きな課題だったことがわかる。一方で、寛文元年(1661)に大坂城の警備に当たる定番となった旗本の渡辺氏は、1万石の加増を受け、大名となったが(後の伯太藩)、家臣団を拡大する必要があり、大坂で何人もの牢人を抱えている。当時、大坂では主家を求める牢人が大勢おり、だからこそ治安統制の対象だったのである。そして、17世紀も後半になると、土田清左衛門父子のように容易に主家を得ることは困難になっていくのであった。

土田文書は、近世成立期の武士の実態をリアルに伝え、また17世紀の大坂の都市社会状況を知ることのできる貴重な史料である。(文学研究科 塚田 孝)



140周年展と大学史資料館(大学博物館)実現にむけてご寄附のお願い →大阪市立大学夢基金
お申込み時にTOP1「創立140周年記念事業」を選択してください
【お問い合わせ】大学サポーター交流室(夢基金担当) TEL06-6605-3415
<https://www.osaka-cu.ac.jp/ja/about/fund/xbtf2s>

編集発行
(仮称)大学史資料館設立準備委員会
学術情報総合センター6階 大学史資料室内
TEL: 06-6605-3261



チョウセンゴヨウ (図1, 4, 6, 7: 五葉松のグループ)、スラッシュマツ (図2, 8: 三葉松のグループ)、アカマツ (図3, 5: 二葉松のグループ)。植物園内に植栽されているスラッシュマツ (図9)。図1~3のスケールバーは1 cm。図5, 6の目盛りは1 mm。

植物の多様性

標本から読み取るマツの特徴「まつぼっくりのトゲとへそ」

大阪市立大学理学部附属植物園には、現在の日本に生育するマツだけでなく、かつての日本に生育したマツの仲間が植栽されている。園内にある展示室には植栽されているマツのまつぼっくりが展示してあるので、生きている植物とあわせて、これらの標本を観察すると、マツの仲間の多様性がよく分かる。

マツ属は今生きている裸子植物（種子をつけるが花は咲かせない植物）の中で最も大きなグループで、北半球に約100種が生育している。マツ属はゴヨウマツ（五葉松）、ミツバマツ（三葉松）、ニヨウマツ（二葉松）の3グループに大きく分けられ、そのうちミツバマツのグループは、現在では北米から中米にのみ分布する。マツ属の葉は「さや」の中に束になっているが、これらのグループはその名の通り、さやに入る葉の本数で分類することができる。例えば、ゴヨウマツなら、1つのさやに5本の葉が束になって入っている。

一方、この3グループは、まつぼっくりの形も大きく異なる（図1~3）。まつぼっくりは、葉が変化してできた鱗片がらせん状に並んだもので、マツ科の場合、1つ

の鱗片に2つの種子がつく（図4）。ニヨウマツとミツバマツの種子には羽のような構造があるが（図5）、ゴヨウマツにはない（図6）。また、鱗片には、「へそ」とよばれる構造がある。へそは、ゴヨウマツでは鱗片の先端に（図7）、ニヨウマツとミツバマツでは、鱗片の先端付近の裏側につく。ミツバマツではへそに鋭いトゲがあるが（図8）、ニヨウマツではトゲが目立たない（図3）。

現在の日本には、ゴヨウマツの仲間としてハイマツ、チョウセンゴヨウ（図1, 4, 6, 7）、ヤクタネゴヨウ、ヒメコマツが、ニヨウマツの仲間としてアカマツ（図3, 5）、クロマツ、リュウキュウマツが分布しているが、ミツバマツの仲間（図2, 8, 9:スラッシュマツ）は分布していない。しかし、約1000万年前ごろまでは、日本にもミツバマツの仲間が生育していた。なぜ日本から絶滅してしまったのかは不明であるが、絶滅した時期は地球全体の気温低下が本格化した時期と重なる。もしかすると、ミツバマツの仲間は寒いところが苦手なのかもしれない。

（理学部附属植物園 山田敏弘）



準備室だより

◆来年の140周年展にむけて、文系（大学史・文系資料）・理系（理系資料・古人骨）・展示設計ワーキンググループで、展示計画を固めつつあります。

◆大阪市立大学ホームページの創立140周年記念特設サイトに、【「大学史資料館」の設立をめざして】が2020年1月に公開されました。140周年展および大学史資料館の準備状況の報告や、【NEWS LETTER】などを順次掲載していきます。ぜひご覧ください。

◆この【NEWS LETTER】は、大阪市立大学 学術情報総合センター ホームページの学術機関リポジトリでも公開しています。「大学史資料館」で検索してください。

（仮称）「大学史資料館」設立 準備委員会からのお願い

現在、学内にある資料の所蔵調査を行なっています。学術資料そのもの、研究の過程で残された資料類、実験装置や器具類、実習に用いられた教材や作品などを、大学史にかかわる資料とともに探しています。候補となる資料がありましたらご一報ください。

→学術情報総合センター6階 大学史資料室内 TEL: 06-6605-3261